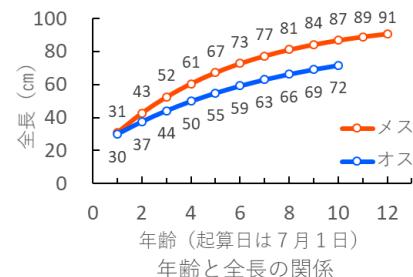


ヒラメ〔地方名：そげ、はが、こばら（小型）〕

1 生態

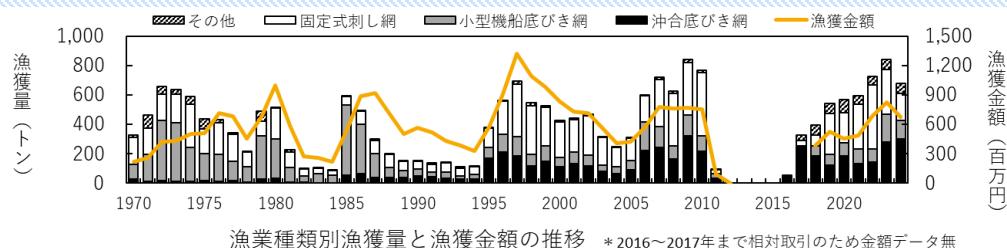
- 日本各地沿岸の水深150m以浅、粗砂及び砂礫域に生息します。夏季は産卵期のため沿岸へ、冬季は沖合へ移動します。
- オスは満2歳、メスは満3歳で成熟魚が見られます。全長ではオス35cm、メス44cmで成熟します。産卵期は5～8月で、産卵様式は数十回に分けて行う多回産卵型です。
- 成魚は主にイワシ類等の魚類、幼魚期はアミ類等の甲殻類を食べます。

*「令和5（2023）年ヒラメ太平洋北部系群の資源評価」により右図を作成



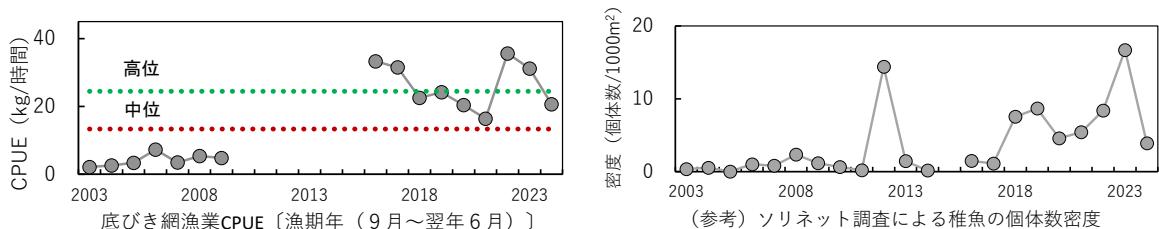
2 漁業に関する情報

- 沖合底びき網及び小型機船底びき網や刺し網、釣り等で周年漁獲されています。
- 2024年（令和6年）の漁獲量は678トン、金額は680百万円でした。
- 2011年3月の震災以降、操業自粛や国による出荷制限で水揚げはありませんでしたが、2016年（平成28年）10月から漁獲が再開され、漁獲量、金額は震災前の規模まで増加しています。



3 資源の状態

- 原発事故の影響により操業が限定されている中、震災以降、底びき網漁業のCPUE（曳網1時間あたりの漁獲量）は、中位～高位で推移しています。
- 2024年（令和6年）漁期の資源水準は中位で、資源動向は増加傾向にあります。
- 毎年7～10月に実施する調査船調査の結果、2018年（平成30年）以降、0歳個体の個体数密度は高位で推移しており、良好な加入が継続しているものと考えられます。



4 資源管理の取組み

- 漁業者が自主的に水揚げ全長を制限（相双地区50cm以上、いわき地区40cm以上）し、資源の有効利用を図っています。
- 栽培漁業対象種として、毎年約100万尾の種苗を県内各地で放流しています。震災後に放流尾数が減少しましたが、2019年（令和元年）から100万尾放流が再開されました。

